山地集落の活性化への取り組み *

――山梨県早川町の事例――

福宿光一 ** ・森　俊輔 **

I　はじめに

近年，わが国では，過疎地域の活性化，村おこし，町おこし等に関する様々な方途が模索され，諸事業も全国的に多岐にわたって展開されている．本研究は，このような状況下，立正地理学会の「中央高地の活性化研究委員会」のち「地域の活性化に関する研究委員会」(1990～1994 年度)の事例研究の一環である．本稿は，研究対象地域としてわが国でも典型的な過疎地の一つである山梨県南巨摩郡早川町を取り上げ，福宿と森による共同調査の報告である．特に早川町の活性化への取り組みの背景と理念，旧村一拠点整備による地区ごとの活性化事業と，それを通しての活性化のあり方を考えたい．

II　早川町の活性化への取り組みの背景と理念

1．早川町の概要と変容

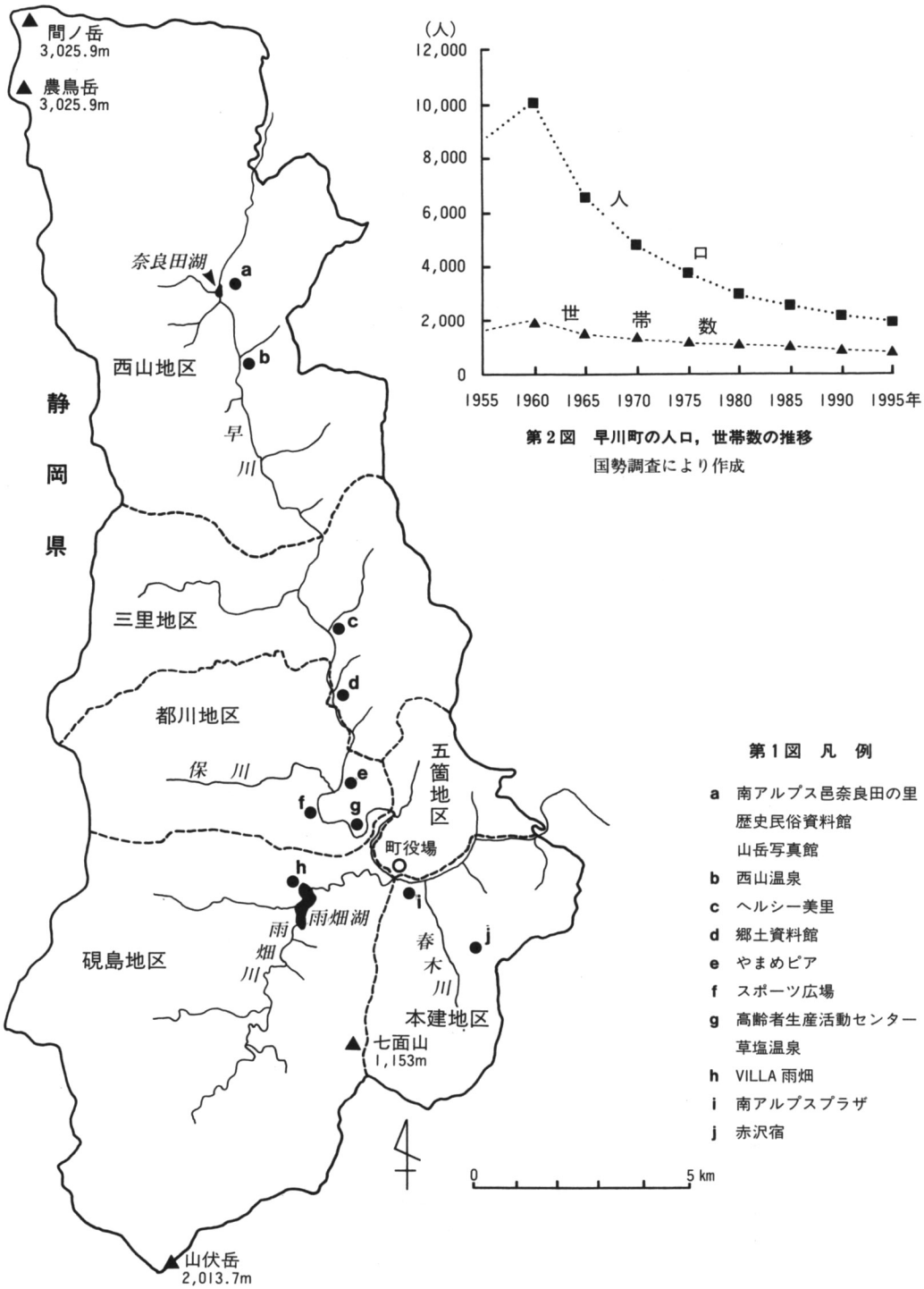
早川町は山梨県西端に位置し，標高 3,000 m 級の南アルプスに源を発する早川沿いの深い峡谷にある．町域は東西約 16 km，南北約 38 km で，その面積は 369.86 km² と広大で，山梨県下最大である．ほぼ南北方向に流れる早川をはさんで，東側は巨摩山系，西側は南アルプス山系に属する山岳地帯で，雨畑川をはじめ多くの支流が早川に流入している．地質的には糸魚川・静岡構造線が町を南北に縦断しており，各地に崩壊地がみられる．年降水量は約 2,200 mm で，山梨県下屈指の多雨地域である．平均戸数約 40 戸の 37 集落が標高約 250 m から 850 m までの間に点在し，南部の集落と北部の集落とでは約 30 km も離れている．町とはいえ，実質は典型的な山地村である．

広大な町域の約 96 %は山林であるが，林業は不振である．傾斜区分でみると，30° 以上の面積が 55.3 %，15～30° の面積が 42.7 % で，あわせて 98 %が急傾斜地である(早川町資料による)．従って農耕適地はきわめて少なく，早川沿いに狭い田・畑が分布しているにすぎない．農畜産物は米・だいこん・こんにゃく・茶・野菜・豚などがあるが，いずれも少量・少額である．1960 年当時 316 ha あった耕地は，1990 年には 64.2 ha（田 17.4 ha，畑 31.8 ha，樹園地 15 ha)に，農家数も 1960 年の 929 戸が 1990 年には 328 戸(うち 0.1～0.3 ha が 264 戸)といずれも激減している(世界農林業センサスによる．第 1 表)．早川町は，かっては金鉱などの鉱山や，林業，電源開発で栄え，特に 1960～70 年頃までは町民の多くが水力発電や電源開発関係の職業に従事し，産業の中心をな

[キーワード]　1 山梨県早川町　2 山地集落　3 過疎　4 活性化事業
[keywords]　1 Hayakawa-cho, Yamanashi Prefecture　2 mountain village　3 kaso (under population)　4 activation project

* 本稿の概要は，1994 年度立正地理学会研究発表会において発表した．

**白鷗大学　***山梨県立甲府工業高等学校



第1図　早川町のプロフィール

第2図　早川町の人口，世帯数の推移
国勢調査により作成

していたが，その後の完工，施設の自動化・合理化などによって昔日の繁栄はみられなくなった．

産業別15歳以上就業者数は，1960年当時は6,009人，うち第1次産業従事者が37.7％を占め，第3次産業従事者は14.4％であったが，1990年には就業者数1,074人，うち第1次産業従事者は7.8％と減少し，第3次産業従事者が52.6％と増加し，逆転現象がみられる（国勢調査結果による．第1表）．

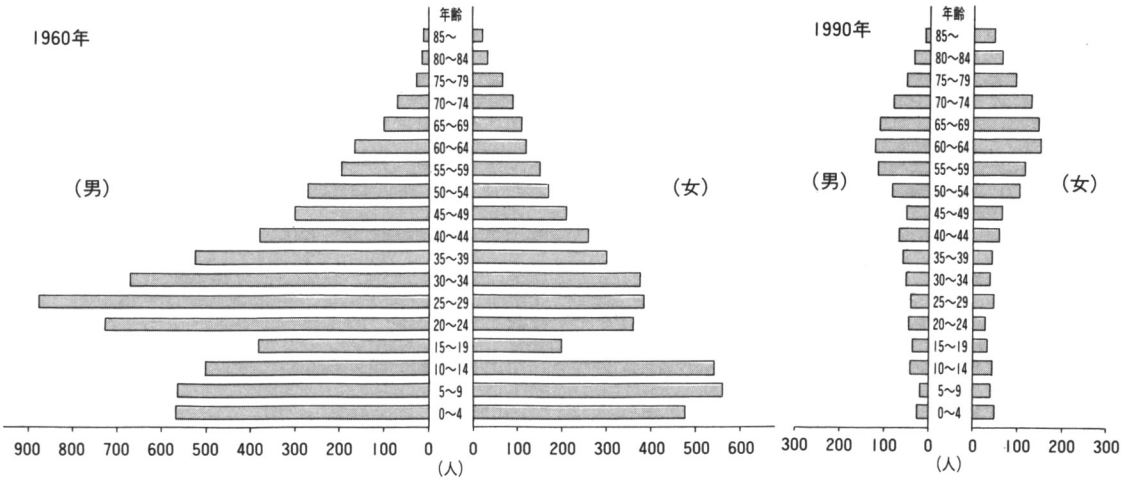
第1表　早川町の1960～1990年の変容

No.	項　　目	1960年	1990年
1	世帯数（世帯）	2,015	988
2	人口（人）	10,679	2,269
3	0～14歳人口比（%）	30.4	10.0
4	15～64歳人口比（%）	65.0	56.6
5	65歳以上人口比（%）	4.6	33.4
6	産業別就業者総数（人）	6,009	1,074
7	内第1次産業就業者比（%）	37.7	7.8
8	内第2次産業就業者比（%）	47.9	39.6
9	内第3次産業就業者比（%）	14.4	52.6
10	農家総数（戸）	929	328
11	内専業農家数（戸）	46	104
12	第1種兼業農家数（戸）	244	8
13	第2種兼業農家数（戸）	639	216
14	小学校児童数（人）	1,404	57
15	中学校生徒数（人）	479	50

資料：No.1～9『国勢調査』，No.10～13『世界農林業センサス』，No.14～15早川町教育委員会による．

早川町は1956年に西山・三里・都川・硯島・五箇・本建の6ケ村が合併して町制を施行した所で（第1図），当時の人口は8,116人であった．その後，1960年の2,015世帯，10,679人をピークに，以後，減少の一途をたどるようになり，1970年には4,862人と半減し，1990年には988世帯，2,269人，1995年には896世帯，1,977人と激減している（国勢調査結果による．第1表，第2図）．1990～1995年の人口減少率－12.9％は，山梨県下で最も高率である．

年齢別人口構成は，1960年には15歳未満30.4％，65歳以上は4.6％であったが，1990年には15歳未満10.0％，65歳以上33.4％で（国勢調査結果による），若年層の減少，高齢者の増加，人口の高齢化が著しい（第1表，第3図）．



第3図　早川町の性別・年齢別人口構成（1960年，1990年）

国勢調査により作成

教育面でみると，小学校で最も児童数の多かったのは1960年で1,404名(6校)，中学校では1965年で生徒数584名(5校)であったが，1993年の場合，小学校児童数73名(2校)，中学校生徒数45名(1校)と，ともに最多期と比較して激減している（早川町教育委員会資料による．第1表)．

以上のように，早川町は1960～1995年に至る間の変容はきわめて激しいものがあり，あらゆる面でいわゆる過疎化が著しく進行している．

2．活性化への背景

このような状況の中で，住民の過疎への不安が高まるうち，1982年8月1日から2日未明にかけて早川町を直撃した台風10号は町全体に大災害をもたらした．被害総額は百数十億円にのぼり，その復旧には莫大な費用と歳月を要することとなった．この災害が過疎の進行により拍車をかけるのではないかと懸念されたが，町民は郷土早川を思い，災害復旧という共通目標をたて，高まった郷土愛の意識を町づくりに活かそうとしたのである．町当局は早川町の再生に向けて1983年に「台風10号年は村おこし元年」と位置づけ，新しく「長期総合計画」を策定することとなったのである．

3．町づくりの基本理念

早川町では，1980年に就任した辻一幸町長のもとに町を挙げて町づくりに取り組んでいる．町長は，人口の減少傾向が続いているものの，今住んでいる人が「この町に住んでいて良かった」と思えるような町づくりを目指している．そして「自ら考え自ら行う地域づくり」を町づくりの基本としている．

町では長期総合計画策定のため，町民の各界・各層の代表により「潤(うるお)いと活力のある町づくり計画審議会」を設立した．この中で，過疎からの脱却を計るためには「発想の転換」が必要であり，行政と町民が一体となって現況の打破に努めることとした．その結果「早川町は南アルプスの真っただ中にあり，山村の素朴な人情や温かな住民のふれあいが存在している．それは，よそにはない個性である」という共通の認識を得たのである．そして「山村は山村でよいではないか．住宅団地をつくったり，企業を誘致して工業団地を造成することが山村の使命ではない．自分たちの力で何とかしよう（自己努力）という「開き直りの発想」も生れたのである．このようなことをふまえて，長期総合計画では「潤いと活力のある町づくり」を基本理念として，それを支える三つの基本方針を設定し，町民と行政が一体となって計画的な町政の推進を図っている．その基本方針は次の三つである．

①旧村一拠点整備を目指し，それを核とした町づくり

②自然を背景とした観光のまちづくり

③住民が誇りにできる環境整備（公共施設，道路，上・下水道)

1)旧村一拠点整備

早川町は既に記述したように，6ケ村が合併して町制を施行した広大な面積の町である．従って，住民は旧村意識が強く，行動も旧村単位の場合が多い．そこで先ず町の活性化，振興のためには「旧村意識を呼び戻して，各旧村が個性ある事業を行ってゆくべきだ」という考え方で，旧村意識の高揚，郷土意識の再構築，愛郷心の育成が肝要であるとした．そして，地元を熟知した地元住民の参加を原則とし，行政と住民とが一体となって各地区（旧村）の旧村役場所在地を中心拠点として整備を計ることとしたのである．

一般に地域活性化事業は，即効性ある経済効果に期待する傾向が強いが，早川町では経済効果を急がず，経済外効果を主眼に精神的・文化的面での高揚を図り，「心の過疎」[1]をなくする努力が必要であるとした．八ケ岳山麓や富士山麓と同じでは意味がない（辻町長談）という．さらに子孫へ残すもの，後

世に継承できるもの，既に町外に流出した人たちにとって自慢できるもの，誇れるものを創造したいという構想がある．

これらの具体的な手法として，①南アルプスの自然を活かす，②歴史と文化を活かす，③都市との交流を推進する，ことにより旧村である地区を活性化しようとするものである．即ち，①と②の項目である自然や文化の双方を活かし，③の都市交流に結びつけることで地域の活性化を図るということである．そして各地区ごとに次にあげるようなキャッチフレーズを掲げて個々の事業に取り組んでいる．

・歴史とロマンの里，秘境奈良田（西山地区）
・野鳥と水車と休息の里（三里地区）
・都市と町民のふれあいと活性化の里（都川地区）
・森と湖と硯の里，グリーンビレッジ雨畑（硯島地区）
・芸術・文化と自然とのふれあいの里（五箇地区）
・信仰とやすらぎの里（本建地区）

そして，旧村一拠点づくり事業を推進するために旧村ごとに団体が組織されている（第2表）．

2) イメージ戦略

早川町では，町のイメージアップ，PRのため「町のブランドは南アルプス」と位置づけてイメージ戦略を展開している．そのため町内の諸施設，製品，イベントなどに「南アルプス」を冠することとした．例えば南アルプス邑（むら），南アルプス街道(県道120号，早川町を南北に縦断)，南アルプスプラザ，南アルプスの館，南アルプス山菜祭り，南アルプスハム，南アルプスふれあい広場，南アルプスふるさと活性化財団などである．

III　活性化事業

1．(財)南アルプスふるさと活性化財団など

早川町では1988年3月に町の過疎化の防止，進んで過疎からの脱却に資するため，過疎地域の活性化につながる諸活動，都市と山村の交流を促進する諸行事等を行う「財団法人　南アルプスふるさと活性化財団」(以下，財団と略称)を設立した．この財団の基金は町が出資した3,000万円で，理事長は町長が務めている．この財団の寄附行為第4条によると，目的を達成するために事業として次の6点をあげている[2)]．

①都市と山村との交流の場を創設するための各種行事の開催
②都市と山村との交流を促進するために必要な情報の収集及び提供
③過疎地域の活性化に資するための講演会，研修会の開催
④過疎地域における居住快適性の保全及び形成に関する調査研究
⑤過疎地域の地方公共団体が設置する施設の管理の受託
⑥その他この法人の目的を達成するために必要な事業

この財団は公共事業を目的とし，早川町役場から5名が出向し，常勤職員，パートなど勤務者は約40名である．勤務者のほとんどは早川町の住民で，地元民の雇用に貢献している．特に30歳未満の職員が6名おり，若い世代の雇用の場を創出している．町

第2表　早川町の活性化に関する各種団体

No.	団体名	結成年度	No.	団体名	結成年度
1	三里地域振興協議会	1988	4	赤沢青年同志会	1980
2	五箇地域振興協議会	1991	5	西山の明日を拓く会	1992
3	硯島地域開発協力会	1976	6	早川流域に水を甦らせる会	1990

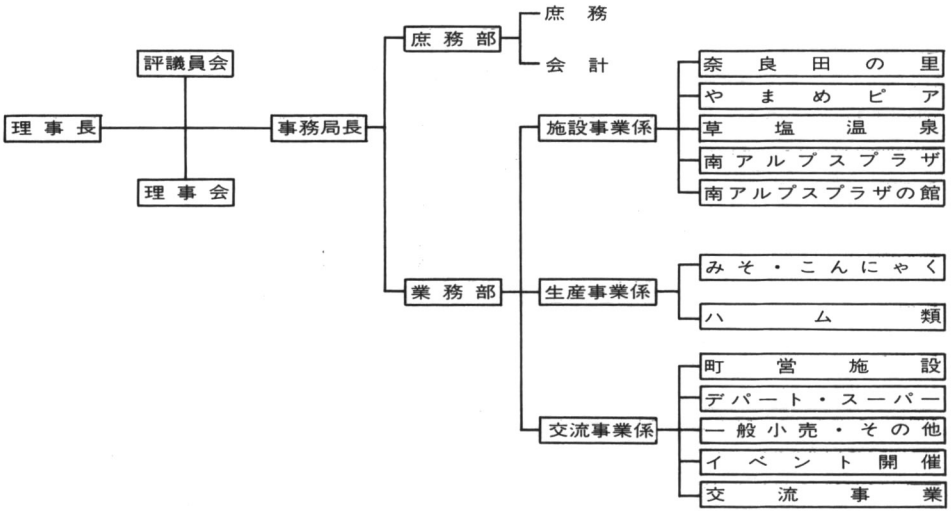
注：6以外は旧村が単位となっている．　資料：早川町資料による．

主導による雇用機会の創設として注目される．財団は，町から奈良田の里や町営草塩温泉，インフォメーションセンター，高齢者生産活動センター等の管理運営を委託され，また，財団は独自の各種のイベントの計画と実施を行っている．財団の組織体系を図示すると次の通りである（第4図）．

財団は設立後7年を経過し，それぞれ成果をあげつつあるが，各事業については後述する．財団の経営収支は，1993年度の場合，収入（役場納入額）12,034.5万円，支出16,251.4万円，差引4,216.9万円の赤字，1994年度は収入12,268.2万円，支出13,871.5万円，差引1,603.3万円の赤字であった．しかし，この程度の赤字は町当局の考えでは，町民の雇用の場の提供，町の特産品づくり，観光資源や観光施設の維持管理などの効果を考えると止むを得ないものであり，財団の存在価値は大きいと評価している．

また，この財団のほか，早川町役場内に運営協議会事務局を置く「ふるさと南アルプス邑特別町民」の制度がある．1984年に発足した制度で，都市と山村との交流を目指して広く特別町民を募集している．年会費10,000円で，特別町民には，町の広報紙，ふるさとカレンダーの発送のほか，町の諸施設の町民同様の使用の特典があり，さらに季節に応じた町の特産品「ふるさとの味」が年3回直送されている．特産品は，例えばこんにゃく，山菜加工品，乾燥椎茸，茶，栗，蜂蜜，ハム，みそなどである．特別町民数は，1993年536名，1994年395名，1995年316名と年々減少傾向にある．これは，特別村民に送る特産品がマンネリ化し，飽きられてきたことなどがおもな理由としてあげられている．一方，林産物も地元では徐々に品不足で入手困難になってきている．近年，特別町民，特別村民，ふるさと会員などの制度が地域活性化に向けて全国各地で行われている[3]．これについて，他地域の事例について比較検討し，問題点は何かを考えてみる必要がある．

財団のほか，南アルプス邑光源の里協会（光源の里温泉　ヘルシー美里），そばの里早川組合(そば処アルプス)，南アルプス邑硯の里協会(グリーンビレッジVILLA雨畑)があり，町営施設の受託・管理を行っている．



第4図　㈶南アルプスふるさと活性化財団組織体系図

㈶南アルプスふるさと活性化財団資料により作成

2．地区（旧村）別活性化事業

1)西山地区

町の最北部，早川最上流域の深い峡谷沿いの標高810～850 m の旧西山村奈良田とその周辺地区である．古くは孝謙天皇遷居の伝説[4]や，1950 年代前半まで焼畑農耕が行われていた[5)~7)]などで知られている．このような古い文化と，ロマンの里にふさわしい環境を地域活性化につなげようとする各種のプロジェクトが行われてきた(第 3 表)．町当局の行政の責任として，奈良田の貴重な古いものを残したいという思いに対して，当初は地元民の反応は鈍く，真剣に受け取らなかったようである．しかし，一歩一歩積み上げていく中で，地元民の感情にも変化が表われ，徐々に協力が得られるようになったとのことである．辻町長によれば「地域づくり」というのはまさにこういうものだと思い知らされたという[8]．

第 3 表に掲げた管理中央センター，奈良田の里温泉をはじめ諸施設は「奈良田の里」として一つにまとまって整備され，その管理は既述の財団に委託されている．年間約 25,000 人の観光客が訪れており，料金収入も年約 3,000～3,200 万円と財団の施設事業収入では第 1 位を占めている(1992～94 年度)．奈良田の里温泉は，秘境の霊湯，女帝の湯として知られ，入浴客が多い．

歴史民俗資料館(1984 年 11 月開設)は，国指定の重要有形民俗文化財である焼畑にかかわる農耕用具 698 点と，アラク小屋をはじめ焼畑文化を伝える多数の資料が展示されている．

南アルプス山岳写真館・白籏史朗記念館（1984 年開館）は，山梨県出身の著名な山岳写真家である白籏史朗氏の作品が展示されており，南アルプスの魅力も紹介している．また，毎年，白籏史朗賞・日本山岳写真コンテストを行い，山岳写真の振興，優れた山岳写真家の発掘と育成を目指している．コンテストには全国から約 2,000 点にのぼる応募があり，早川町の PR にもなっている．このほか，特産民芸品加工直売施設（早川風民家・奈良田風民家）がある．

2)三里地区

三里地区は，西山地区とともに早川町では最も自然度の優れた旧三里村を中心とした所で，おもな施

第 3 表　西山地区の施設

名　　称	事業年度	補助事業名	規　模	総事業費
管理中央センター	1982	第三期山村振興農林漁業対策事業費(農林水産省)	304.90 m²	40,000 千円
歴史民俗資料館	1983	国宝重要文化財等保存施設整備費補助金(文化庁)	338.28	50,000
奈良田の里温泉	1983	町単独事業	115.00	32,980
特産民芸品加工直売施設(早川風民家)	1985	第三期山村振興農林漁業対策事業費(農林水産省)	154.90	32,860
特産民芸品加工直売施設(奈良田風民家)	1986	第三期山村振興農林漁業対策事業費(農林水産省)	150.00	27,870
伝習施設（水車小屋）	1988	第三期山村振興農林漁業対策事業費(農林水産省)	24.79	6,831
山岳写真館	1990	地域個性形成事業（国土庁）	314.72	123,715

資料：早川町資料による．

設は第4表に示した通りである．大原野にある光源の里ヘルシー美里は，地域の自然や伝統など，優れた魅力や特性を活かしながら山村と都市との交流を積極的に行うための拠点として設けられた町営の宿泊施設である．1985年1月に閉校となった早川北中学校の木造校舎を利用した宿泊・研修・入浴(温泉)・休憩施設で1991年完成した．宿泊可能人員93名で，体育館，夜間照明付広場，体験農場（野菜・いも類・もろこしなど）がある．運営は南アルプス邑光源の里協会に委託されている．東京都品川区と「ふるさと交流」の締結を行っているが，この施設の設置の場合でも，品川区が設計したものをただ管理するだけでは意味がない．地域づくりには地元にあるものを活用して行こうという村づくりの思想が生きている．年間宿泊者数は1992年度2,285人，1993年度2,626人，1994年度3,910人で，このうち品川区民の利用は約30～35％である．

同じく大原野にある早川町郷土資料館は，旧三里村役場（のち旧三里支所）の建物を利用したもので，山地の特色を示す耕作・収穫・加工・生活用具，民具，野鳥絵画などが展示されている．また，地元集落の住民の熱意によって，むら自慢甲斐路の特産品育成事業としての「そば処アルプス」が設けられた．ここは店舗は町が造り，経営は地元住民が行っている．1995年7月には，美しい森林づくり事業による野鳥公園がオープンした．

3)都川地区

都川地区は旧都川村に属し，早川町のほぼ中心に位置し，町民会館，町民スポーツ広場を核に山菜祭り，町民体育祭，文化祭，福祉と健康祭り，炎の祭典など数多くのイベントが行われている．活性化のための施設は第5表の通りであるが，草塩温泉，早川町高齢者生産活動センターともに財団が管理運営にあたっている．高齢者生産活動センターは，人口構成の高齢化に対応した雇用機会創出の場で，手づくりハム，みそ，こんにゃく等の特産品加工施設がある．また，渓流釣り(やまめ)，釣り堀(にじます)，バーベキューなどの養魚センター「やまめピア」がある．みそ，こんにゃく，ハムなどの生産事業は約2,868万円，やまめピアは約1,412万円（いずれも1994年度）の収入があり，町の財政に大きく寄与している．特に手作りハムは品質が好評で，贈答用として町民によく利用されており，間接的に早川町のＰＲに貢献している．また，草塩温泉周辺には民宿集落があり，草塩温泉は年収約1,740万円（1994年度）をあげている．

4)硯島地区

硯島地区は旧硯島村に属し，早川町の南西端に位置し，早川の支流雨畑川の峡谷にある．この地区の活性化の拠点は町営の宿泊施設である「南アルプス邑グリーンビレッジVILLA雨畑（国土庁のリフレッシュふるさと推進モデル事業，管理運営は南アルプス邑硯の里協会)である(第6表)．ここは1966年に完成した人造湖の雨畑湖畔に立地し，1983年3月に閉校となった硯島小・中学校の跡地を利用したもので，1986年のオープンである．山村と都市との交流を積極的に行うために，山の家として宿泊（50人収容）・研修・体験学習・合宿等に利用されている．特に宣伝費はかけていないが，口こみで年々徐々にではあるが利用者が増加している．VILLA雨畑の宿泊利用者数は，1992年度4,228人，1993年度4,916人，1994年度5,041人（1995年2月は改装のため休業）であった．また，宿泊利用者のほか，温泉のみの利用，入浴・休憩，日帰り利用（宴会・飲食)などの客を含めると1993，1994の両年とも合計約18,000人であった．宿泊利用者のほとんどは町外の人達で特に8月が多い(第5図)．さらにこの施設の特色は，地域住民の拠り所としても活用され，従業員も地元民の家族の協力によるところが大きい．なお，付帯施設として体育館，夜間照明付広場，プール，キャンプ場（50人収容，バンガロー，ログハウス)，体験農場（茶・こんにゃく・いも類など)，

第4表　三里地区の施設

名　　称	事業年度	補助事業名	規　模	総事業費
郷土資料館	1986	町単独事業	150.00 m²	31,300 千円
ヘルシー美里	1990～91	第三期山村振興農林漁業対策事業費（農林水産省）	786.92	307,899
そば加工直売施設	1991	むら自慢甲斐路の特産品育成事業（山梨県）	78.91	27,645
野鳥公園	1992～93	美しい森林むらづくり事業（林野庁）	20,000	201,200
ヘルシー美里周辺整備	1993	新山村振興農林漁業対策事業費（農林水産省）	10,000	74,000

資料：早川町資料による．

第5表　都川地区の施設

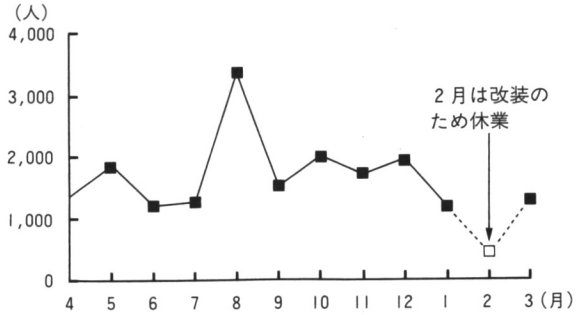
名　　称	事業年度	補助事業名	規　模	総事業費
草塩温泉	1979	町単独事業	346.8 m²	62,960 千円
高齢者生産活動センター	1980	高齢者活動センター建設モデル事業・第二次内水面振興対策事業・特産の里づくり事業（国土庁）	430.0	146,070

資料：早川町資料による．

第6表　硯島地区の施設

名　　称	事業年度	補助事業名	規　模	総事業費
南アルプス邑グリーンビレッジヴィラ雨畑	1984～95	リフレッシュふるさと推進モデル事業（国土庁）	883.47 m²	156,762 千円
キャンプ場	1985	リフレッシュふるさと推進モデル事業（国土庁）	1,500	25,707
キャンプ場	1987	森林とのふれあい環境整備対策事業（林野庁）	3,000	100,000

資料：早川町資料による．



第5図　VILLA 雨畑　月別宿泊者数

VILLA 雨畑資料により作成

創作活動室（硯島焼工芸），体験学習（炭焼き），雨畑湖温泉などがある．炭焼きは，この地区では1955年ごろまでは地域住民の主業で，70歳以上の人達はほとんど製炭経験者であるので，この人達の経験が体験学習に活かされている．

この地区は，700年以前から中国の端渓石にも匹敵する銘石として著名な雨畑硯の産地として全国的に知られ，「硯の里」というイメージが強いが，現在はほとんど生産されていない．

5)五箇地区

本地区は旧五箇村に属し，標高700m前後の山地の緩斜面上に位置する早川町ではへき地である．旧村一拠点整備の中で最も整備の遅れている所である．筆者らは1976年以降無住となった天久保（そらくぼ）の集落について，無住化の過程，挙家離村の様式と離村の要因，土地利用の推移などについて報告したことがある[9]．近年，五箇地区には，自然に魅せられて陶・工芸家などの移住者が見られるようになった．そこで町では地区住民の拠点がないことと，本町住民の芸術・文化の習得の場として，また，創作活動を通しての交流の場として廃校となった早川南中学校を活用して交流促進センターを設立した．

6)本建地区

本地区は早川町の南東端に位置する旧本建村である．本地区の活性化の拠点は赤沢集落である．ここは日蓮宗の総本山である身延山久遠寺と，奥ノ院のある七面山とを結ぶ参道筋にある．明治期から昭和期にかけて七面山参詣者の講中宿として栄え，現在も江戸屋・大阪屋など6軒の旅籠や，約40戸の家が標高約500mの山あいの傾斜地に点在している．1941年の県道開通以後，自動車交通の発達で宿を利用する参詣者は激減し，集落は衰退の一途をたどってきた．しかし，赤沢集落は，軒下に講中のマネギ札を掲げた板張り外壁の切妻式建築の旅籠や，石畳など山岳信仰の宿場としての貴重な景観を残している．

1980年に結成された赤沢青年同志会[10]は，赤沢地区の国の重要伝統的建造物群保存地区指定の原動力となった組織である．同会は，30～52歳の約20名からなり，そのほとんどは一度早川町を離れて都会で働いた経験をもつUターン者である．これらの人達が中心となって建物の保存，景観の修復など郷土の再興を目指して地道な活動を続けている．その目標も，当面の集客による観光化で経済効果を求めるのではなく，住みやすい地域づくり，子孫が誇りをも

第7表　本建地区の施設

名　　称	事業年度	補助事業名	規　模	総事業費
インフォメーションセンター 南アルプスプラザ	1985～86	電源立地促進対策交付金，県広域観光ルート整備事業（通商産業省）	272.83 m²	74,855千円
歴史文化公園	1985	山梨歴史文化公園保存活用施設整備事業（山梨県）	73.8	6,800
石畳	1983 1986～94	町単独事業	540 m	65,000
石畳		県単土地改良事業	継続中	
赤沢宿浄化センター	1988～89	特定環境保全公共下水道事業（建設省）	処理面積 109.02	166,036

資料：早川町資料による．

って住める地域づくりを目指している．石畳・石垣の修復も100年先の文化財を目標としている点などに大きな特色がみられる．盆踊り，千灯祭などの村祭りの復活や，石畳沿いのしだれ桜の植栽にも積極的に力を入れている．

町当局は，1990年に早川町歴史的文化財保存地区保存条例を制定し，赤沢集落の町並み保存を財政的に助成してきたが，1993年5月には国の文化財保護審議会は赤沢地区を「重要伝統的建造物群」に選定し，国の助成が受けられるようになった．また，山梨県では赤沢地区を山梨歴史文化公園として整備したり，文化財保護の衛生面の立場から赤沢宿浄化センターを設立した．

赤沢宿の入口である早川沿いの角瀬（すみせ）には，早川町の入口ということから1986年にインフォメーションセンターとして「南アルプスプラザ」（財団管理施設）が設けられた．ここは観光案内，特産品販売，軽食喫茶などを行い，1994年度には約2,400万円の収入があった（第7表）．

Ⅳ　結びにかえて

早川町の活性化への取り組みへの理念と，活性化事業は上述の通りである．早川町の「潤いと活力ある町づくり」が辻一幸町長の「発想の転換」「開きなおりの発想」をもとにした強い指導力と推進力，即効性ある経済効果よりも経済外効果を主眼とした精神的・文化的面での高揚を計る町政，町と住民とが一体となった旧村単位の愛郷心の再構築などにみられる．一方，活性化諸事業の財源として，国・県・町などによる各種の補助事業を熱意をもって最大限に活用している点も見逃せない．

早川町では新長期総合計画として，21世紀に向けて日本・上流文化圏構想[11]を打ち出している．これは中流圏，下流圏に対して，上流圏・早川町のもつ役割，誇り，くにづくりを構想した壮大な哲学である．依然として人口減少，高齢化が進行している状況下，今後の早川町の動向に注目したい．

本研究に際しては，貴重な御教示と現地の御案内をいただいた早川町長辻一幸氏をはじめ，町役場・各施設や地元の多くの方々に大変お世話になった．記して謝意を表したい．

なお，本研究は立正地理学会の研究委員会として設けられた「地域の活性化に関する研究委員会」の助成を受けたものである．

（1997年1月22日　受付）
（1997年1月31日　受理）

注および参考文献

1) 平松守彦大分県知事は「過疎は怖くない．怖いのは“心の過疎”だと常に県民を励ましているという．
平松守彦（1990）：『地方からの発想』岩波新書138，227～228．
2) (財)南アルプスふるさと活性化財団設立趣意書（1988年）．
3) 地方自治政策研究会編（1989）：『全国地域づくり最新データ――ふるさと創生1億円の活用に向けて――』第一法規，367～369．
これによると，特別村民・ふるさと会員制度の事例は全国で151ある．
4) 早川町教育委員会（1980）：『早川町誌』早川町役場，346～347．
5) 西山村誌刊行委員会（1960）：『西山村誌』68～71．
6) 民族文化映像研究所（1987）：『奈良田の生活と自然とのつながり――焼畑を中心に――』早川町教育委員会，52 p．
7) 早川町教育委員会（1990）：『焼畑』20 p．
8) 辻一幸（1993）：南アルプスをキーワードに――早川町のまちづくり――地域調査，1993年10月号．
9) 福宿光一・森　俊輔（1983）：山地集落の無住化と土地利用の推移――山梨県早川町天久保の場合――．地域研究，**24**-2，16～26．
10) 赤沢青年同志会，望月利和（1992）：『石畳と下水道――Uターン組の大計画――，『地域術　38の町と村づくり』晶文社，179～185．
11) 早川町（1993）：『早川町新長期総合計画．日本上流文化圏構想――光きらめくくにづくり――』94 p．